

3. 教師のみた児童生徒の連帯感

実践研究を進める上での参考とするために、児童生徒の指導に直接かかわっている教師が、児童生徒の連帯感をどのようにとらえているかを調査した。

調査対象教師は、6月から8月までの3か月間に、当教育センターの講座に参加した457名（小学校314名、中学校143名）である。

設問は、前述の連帯感の概念をもとに作成し記述式を中心とした。

この調査により、次のような結果が得られた。

(1) 学校生活における児童生徒の連帯感の有無

連帯感の有無については、各方面から指摘され、その欠如が憂慮されているが、調査では次のようなことがあげられている。

- 学級意識、仲間意識が不足している。
- 協力、助け合い、思いやりの心に欠ける。
- 自己中心、自己主張、雰囲気こわしがしばしばみられる。
- 作業や奉仕活動では、取り組みにばらつきがみられる。
- 横のつながりは比較的にみられるが、縦のつながりは弱い。
- 悪いことまでかばい、かくす傾向がある。

(2) 学校教育における連帯感を育成する場

連帯感を育成する場としては、各教科・道徳・特別活動はもとより、登校から下校までの学校生活のすべての場をあげている。

これをさらに細分化してみると、次のように分類することができる。

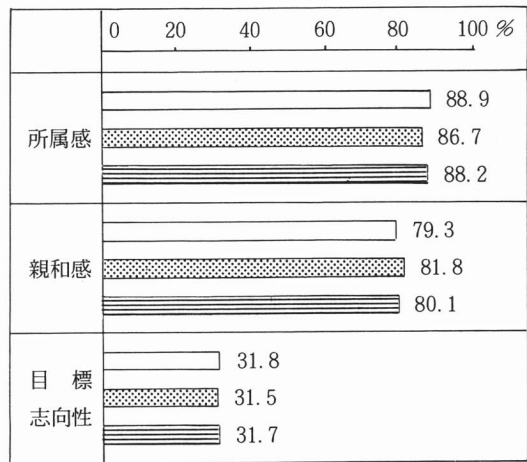
① 学校・学級経営全般を通して

- グループ（班）活動
- 人間関係
- 目標実現への努力
- 集団活動
- リーダーの育成など

② 各教科を通して

- グループ（班）学習
 - 音楽、図工・美術、体育などの学習
- ③ 道徳教育を通して
- ④ 特別活動を通して
- 児童（生徒）活動
 - ・ 学級会活動
 - ・ 児童（生徒）会活動
 - ・ クラブ活動
 - 学校行事
 - 学級指導
- ⑤ 創意を生かした教育活動を通して
- ⑥ その他の活動を通して
- 清掃（縦割り清掃）
 - 部活動
 - 集団登下校
 - 業間の活動及び遊び
 - 給食 など

(3) 児童生徒の集団生活をどのようにとらえているか。



□ 小学校 ▨ 中学校 ▨ 平均

目標志向性が希薄であるといえるが、集団の目標が、集団の一員としての自覚に基づいて、成員一人一人の目標としても受け入れられるという、児童生徒一人一人の、目標設定から計画・実践までの共通理解の不十分さがうかがわれる。